

I 調査の動機

1. はじめに

去る昭和42年夏、向野田古墳が採土進行中の宇土市松山町の丘陵で発見されてから早くも10年の歳月が過ぎ去った。

その間、宇土高校社会部ではとりあえず墳形実測につとめ、クラブOBをはじめ熊本市九州学院、同第二高校などの考古学部員、地元研究者などの協力の下に採土の池田組および宇土市教育委員会の諒承を得て、県当局へ連絡、調査を行なってきた。昭和43年5月の発掘調査は、採土に追われてやむなく行なわれた。

その後、採土から前方部消滅というかなしむべき事態を迎えた。昭和44年9月、当時指導をいただいていた熊本大学松本雅明教授の斡旋により宇土市教育委員会および熊本日日新聞社共催による熊日学術調査団が結成され、本格的な発掘調査が行なわれた。調査関係者はよく奉仕的に努力して下さったことを銘記しておきたい。今日、このような無償の調査活動は到底考えられない。

昨秋、宇土市教育委員会では、同市立図書館郷土資料室展示の向野田古墳出土の鉄器類補修と保存処理のため鉄器類を奈良市の元興寺文化財研究所へ送られた。その折、修理の参考に数年前から実測していた副葬品のうち、鉄器類の図面を提出したことであった。

このたび、市教育委員会から向野田古墳調査報告の執筆を委嘱され、微力ながら終始たずさわった者として責務の一端を果たすことにした。

向野田古墳については、発掘当時、熊本日日新聞社から調査経過の報道があり、ことに平野敏也氏（当時政治部長）により調査団の座談会が催されたことは忘れがたい。

昭和45年10月、熊本大学井上辰雄教授の高著『火の国』により向野田古墳の概要が広く紹介され、古代史の上から教えられるところが多かった。^①

今思えば、松本雅明博士の、高配がなければ、向野田古墳の発掘調査は私たちの手で行なうことはむづかしかったといえよう。さいわい、松本雅明隊長の下に宇土高校出身の佐藤伸二助手がおられ、ベストをつくしていただいた。また当時宇土高校社会部OB農業古田一英、OB熊本商科大学生敷島安人、別府大学生山崎純男、明治大学生石橋新次、九州学院高校生山下敏文諸氏、地元研究者枝森久一、西原昭明両氏らが献身的に協力して下さったことも思い出となっている。

今回、報告作成にあたり、当時宇土高社会部OBの平山修一、高木恭二両氏は、現在市教育

委員会に勤務され、種々の方面でお世話になった。

終りに熊本日日新聞社、宇土市当局、同教育委員会、同文化財専門委員会ならびに調査関係者へ、また県当局、上野辰男主幹、国学院大学乙益重隆教授、原口長之、田辺哲夫、田添夏喜、三島格諸氏のご厚意に心から御礼を申し上げます。

なお、地主池田勲氏は、調査終了後、向野田古墳の後円部付近の地所を宇土市へ寄付されました。同氏の芳志に深謝いたします。

2. 開発と発見

向野田古墳発見のいきさつについては、調査当初松本雅明隊長の「宇土地方の古墳—前期古墳最大の群集地帯—」の論文とともに筆者の「向野田古墳調査の意義—現在までの経過を中心として—」の報文に、そのあらましを記したことがある。

昭和41年夏、当時宇土高社会部の平山修一氏が、向野田の丘陵上に立つ九州電力鉄塔下の地形が古墳らしいことに注目され、部員たち一同と途中まで登ったが、雑木林に覆われ、上へは登れなかったことがある。

同42年夏、同じく部員であった高木恭二氏が向野田の丘陵上で土師器片1個を表採され、さらに前方後円墳らしいことを伝えてきた。その知らせで、早速部員たちと現地に行くと、すでに採土のためブルドーザーが丘陵上をのぼり、採土運搬のためトラック用の道がつけられていた。

トラックの道西側は採土で急な崖となり、その道の丘陵側の削られた低い崖面に点々と土器片や葺石らしい自然石が見付かった。ことに前方部先端とみられる西北の一角で、葺石にまじり、幅数cmの平たいタガをもつ円筒埴輪とみられる土器片など数個が採取され、鉄塔下の高みが後円部にあたることを確認できた。

一見した所、丘陵尾根突端上に立地し、宇土半島基部では比較的大形の前方後円墳であった。前方部切断の形を呈し、その前端に沿って小路がついていた。前方部の起伏は緩かで、続く後円部はやや高くなり、墳丘上の大きな雑木はあらかじめ伐採されていた。墳丘の方向はほぼ南北で、前方部を北にし、南端の高みを後円部とする。墳丘西側のすぐ下方を国道3号線が通っている。

近年、宇土半島基部をめぐる前方後円墳の発見があいついだけけれど、向野田の前方後円墳の存在は私たちに驚かせた。

発見の遅れた事情はいろいろあげられるが、その主な一つは山林に古墳が隠されていたことであった。土地開発で山林の伐採が行なわれ、墳丘の姿が現われた例はほかにもあり宇土市榑鉢山古墳・迫ノ上古墳などがある。岡山県赤磐郡山陽町の丘陵地帯では、最初の分布調査で

は、数カ所の遺跡しか確認されなかったのに、立木を伐採した後にやりなおした所、集落遺跡等7カ所、古墳は新たに65基が見つかったといわれている^④。

今年1月、宇土市内、御手水の丘陵尾根突端で高木恭二氏が前期的な様相をそなえた前方後円墳1基を発見された^⑤。櫟林伐採直後で、倒された木々の上に立てば、やや西南寄りにはるか低く向野田古墳が見下される。この御手水の古墳も、向野田調査の折、山崎氏らが古墳らしい地形を目指して登ったけれど、つかめなかったところである。向野田古墳から北東へ図上、直線距離約250m・標高48mの尾根突端に立地し、はるか有明・不知火両海を望む御手水の古墳は西側が急斜面をなし、東側は墳丘側面を多少削られ、道路となる。いかにも前期的なけわしい感じのする前方後円墳として、向野田古墳などのかかわりを改めて考えさせられる。

註 ① 井上辰雄『火の国』学生社、1970

② 松本雅明「宇土地方の古墳」、富樫卯三郎「向野田古墳調査の意義」熊本日日新聞、1969. 9. 10 付

③ 富樫卯三郎「第2表 宇土半島基部前方後円墳群一覧表」宇土城跡（西岡台）一本文編一、1977. 所収

④ 神原英朗「用木古墳群」岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報(i)山陽町教育委員会、1975

⑤ 御手水の前方後円墳発見、熊本日日新聞、1976. 1 付、
本文校正中、御手水の前方後円墳から近い山腹の道路わきで、採土中箱式石棺8基が出土した。
そのうち2基はT字形に配置される。はるか不知火海を望む高所に立地している。

Ⅱ 古墳の立地と周辺の遺跡

宇土半島基部の主要な遺跡について、昨年「周辺の遺跡から見た西岡台」の小篇でとりあげ、若干所見を記した^①。重複するところがあるけれど、向野田古墳を中心にふたたび素描をこころみることにする。

向野田古墳は、現在熊本県宇土市松山町3993番地に墳丘の後円部が残存している。前方部は採土のため失われてしまった。

国土地理院5万分の1地形図「八代」の図幅東端から13.9cm、北端から1.5cmの地点にあたる。国鉄鹿児島本線宇土駅の南方約3.5km、九州産交バス松山停留所の南方約800mの所にある。国道3号線上に宇土市・不知火町の境界標があるが、その手前すぐ東側丘陵上に立つ九州電力の鉄塔が目印となる。

熊本県西海岸中部で、有明・不知火両海を分ける宇土半島がほぼ東西の方向に突出している。半島全域にわたり宇土山地が縦走し、南北両海岸は狭い平地となっている。半島基部には宇土山地と東方、雁回山南麓に続く丘陵がさし挟むほぼV字状の平野がひらけている。平野の北方に緑川、南方にやや小さな大野川が流れている。

宇土半島北辺には縄文早・前期の轟・曾畑両貝塚があり、現在の有明海沿岸から約5km～8km引っ込んでいて、半島基部のほぼ中央の辺にあっている。半島基部の南辺にも不知火町御領で縄文早期の土器片が出土している^③。

曾畑貝塚の南方約2kmの舌状台地に縄文後期の古保里貝塚^④、さらに半島基部の南辺に同じく後期の松橋大野貝塚がある^⑤。後者は大野川に臨む台地縁辺にあり、かなりの広がりをもっている。

古保里貝塚の西方約1kmの境目・善導寺台地西辺では弥生中期の大形甕棺が出土した。本年2月、その出土地わきの道路拡副工事にともなう調査でも2基の甕棺などが見ついている。轟貝塚の東方1km余の宇土城跡（城山）・轟貝塚北方約0.8kmの北平からも弥生中・後期の甕棺が発見されている。ことに境目遺跡は弥生・古墳・歴史各時代の遺物包含地で、西方の水田地帯は条里制^⑥の痕跡を留めている。

縄文・弥生各期にわたる遺跡にはまだミッシング・リンクのものがあるけれど、半島基部へ北九州・有明海などを通じて、文化の波及が及んでいることが窺われる。

半島基部の弥生文化は、なお究明を要するが、農耕・漁撈などの生産力向上を伴ったことが考えられ、次の古墳文化への社会的基盤を築いたことが想像される。

城山の西方に続く西岡台上に見出された高地性集落跡・防禦用V字溝をそなえた千疊敷は、

城山の周辺に生活を営んだ弥生人またはその後続者とのかかわりを無視できないであろう。そこに生活基盤の変化の生じたことが考えられる。海上その他からの外敵に対するきびしい防備体勢が窺われる。V字溝から二重口縁の古式土師器が出土している^⑦。

向野田古墳の墳頂は標高37m余、半島の山地と雁回山南麓続きの丘陵がさし挟む狭隘地帯東側の丘陵突端に位置する。墳頂から眼下の狭隘地帯を南北に通る国道3号線・鹿児島本線を越えて向かい側半島の丘陵突端に前方後円形の仁王塚古墳がある。熊本商大生らによる実測図がある。仁王塚には一部周溝の跡がみられるが、内部主体は未調査である。近年、墳丘近くまで道路がつけられ、向野田の葺石とよく似た自然石など目についた。仁王塚の墳丘葺石かどうか明らかでない。

仁王塚南方約1.5kmの丘陵上には不知火塚原古墳群がある。その中の塚原第1号墳は封土の失われた横穴式石室で、線刻の舟などの装飾があり、鬼塚ともよばれる。石室の形状から6世紀末～7世紀初頃に編年されている^⑧。

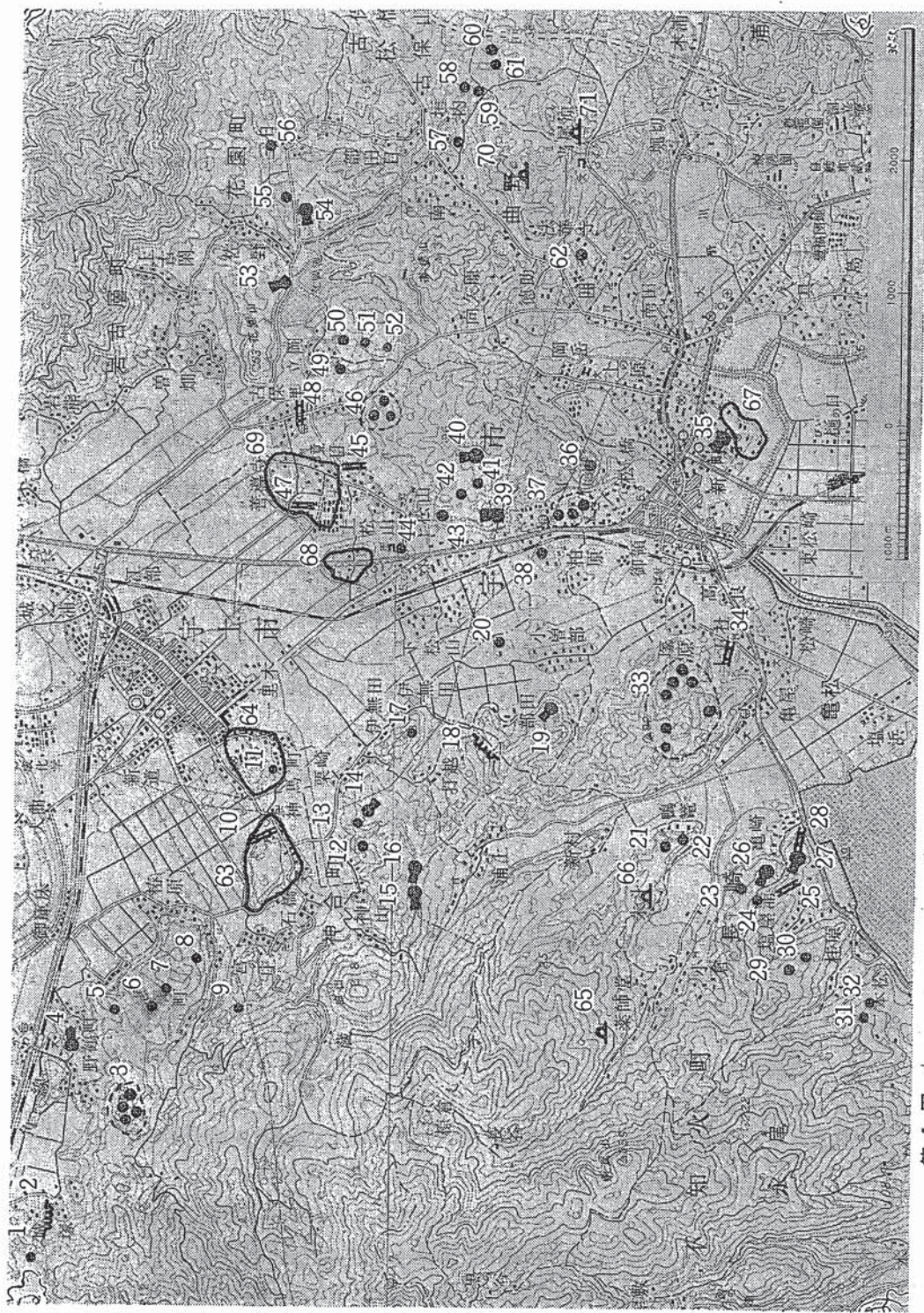
不知火塚原古墳群から西方約1.5km、不知火海沿岸に突出した丘陵上に亀崎古墳群がある。丘陵突端の前方後円形の弁天山古墳^⑨、その北方約500mの丘陵突端に同じく前方後円形の国越古墳がある。弁天山は後円部中央でほぼ主軸と並行の割石小口積みの狭長な竪穴式石室の残骸内に割竹形木棺の粘土床が残っていた。底部穿孔二重口縁の土師器壺がくびれ部北斜面から出土している。4世紀代の古墳とみられる。国越古墳は横穴式石室で、奥壁に平入りの家形石棺がつけられ、中央通路東西両側に屍床があり、家形石棺と屍床の間に狭い別床が設けられ、鉄斧など鉄製品その他多数の遺物が出土した。家形石棺の軒縁と両側前壁に直弧文や三角連続文の線刻彩色の装飾がある。奥壁に上下2個ずつ並行の刀掛突起をそなえる。羨門の扉石に造りつけの巨大な把手がある。各屍床から鏡1面ずつ計3面が出土し、その中の画文帯環状乳神獸鏡は江田船山古墳出土の鏡に同範鏡のあることが指摘されている^⑩。国越古墳は6世紀前半に比定されている。

この古墳は、横穴式家形石棺の船山古墳ほど豪壮な遺物はみられないけれど、半島基部周辺では稀にみる出土遺物の多いものであり、また両者が同範鏡をもつことから5・6世紀の在地首長の発展が示唆されるようで興味がある。

横穴式家形石棺と墓室腰壁の板石や石棺内外に幾何的文様のある例は、有明海東岸地方のそれぞれ新しい土着的な墓制としてとりあげられていることも注意される^⑪。

亀崎古墳群と不知火塚原古墳群の間、長崎の扇状地に突出した丘陵突端に鴨籠古墳がある^⑫。巨大な砂岩4枚を組合せた擲壁が残存し、重厚な、底部やや舟形を呈する家形石棺1基が埋納されていた^⑬。棺蓋に直弧文その他が線刻彩色される。新しい土着的な墓制の例にあげられる。5世紀末から6世紀初頭に位置づけられている。前方後円墳の疑いがあるという。

弁天山古墳西方約1km、海岸寄り丘陵中腹に横穴式石室の桂原古墳がある。奥壁に石棚があ



第1図 周辺遺跡分布図

第1表

周辺の遺跡一覧表

No.	名称	概要	文献
1	城塚古墳	横穴式石室(装飾)	
2	尾上横穴古墳群	14基	富樫卯三郎「城塚尾上横穴古墳群」 宇土市の文化財第3集(1977)
3	神ノ木山古墳群	4基・横穴式石室	富樫卯三郎「神ノ木山遺跡」 宇土市の文化財第3集(1977)
4	天神山古墳	前方後円墳	富樫卯三郎「天神山古墳」 宇土市の文化財第3集(1977)
5	経塚古墳	横穴式石室	
6	東畑古墳	横穴式石室(装飾)	
7	金嶽山古墳	横穴式石室	
8	椿原石蓋土壙	石蓋土壙	三島格「宇土市轟椿原における石蓋土壙の一例」 熊本史学第15・16号(1959)
9	仮又古墳	横穴式石室(装飾)	濱田・島田・梅原「宇土郡緑川村の古墳」 京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊(1919)
10	西岡台石棺	箱式石棺	
11	古城古墳	装飾古墳石材	富樫卯三郎「宇土古城古墳」 熊本の装飾古墳(1976)
12	神合古墳	円墳	
13	猫城古墳	円墳	
14	城ノ越古墳	前方後円墳	富樫卯三郎「熊本県宇土市栗崎町城の越古墳出土の三角縁神獸鏡」 熊本史学第33号(1967)
15	スリバチ山古墳	前方後円墳	富樫卯三郎「摺鉢山古墳」 宇土市の文化財第3集(1977)
16	迫ノ上古墳	前方後円墳	富樫卯三郎「迫ノ上古墳」 宇土市の文化財第3集(1977)
17	久保古墳	円墳	
18	大平横穴古墳	2基	平山修一「大平横穴古墳」 宇土市の文化財第3集(1977)
19	仁王塚古墳	前方後円墳	坂本経堯「仁王塚古墳」 不知火町史(1972)
20	鬼塚古墳	円墳・横穴式石室	坂本経堯「北園鬼塚古墳」 不知火町史(1972)
21	鴨籠古墳	円墳・箱形石室	浜田・梅原「宇土郡不知火村の古墳」 京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊(1917)
22	鴨籠2号墳	横穴式石室	坂本経堯「鴨籠古墳2号」 不知火町史(1972)
23	八久保古墳	箱式石棺	坂本経堯「八久保古墳」 不知火町史(1972)
24	道免古墳	円墳	坂本経堯「道免古墳」 不知火町史(1972)
25	東塩屋浦石棺	箱式石棺	坂本経堯「東塩屋浦古墳」 不知火町史(1972)
26	国越古墳	前方後円墳	乙益重隆「宇土郡不知火町国越古墳」 昭和41年度埋蔵文化財緊急調査概報(1967)
27	弁天山古墳	前方後円墳	富樫卯三郎「弁天山古墳発掘調査概報」 熊本史学第30号(1965)
28	弁天山石棺	箱式石棺2基	坂本経堯「亀崎古墳群」 不知火町史(1972)
29	塩屋浦鬼の岩屋1号墳	横穴式石室	
30	塩屋浦鬼の岩屋2号墳	横穴式石室	
31	桂原古墳	円墳・横穴式石室(装飾)	濱田・島田・梅原「宇土郡不知火村の古墳」 京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊(1919)
32	桂原2号墳	横穴式石室	
33	塚原古墳群	円墳・横穴式石室(装飾)	三島格「塚原第1号古墳」 不知火町史(1972)
34	十五社石棺群	箱式石棺3基	

No.	名 称	概 要	文 献
35	松橋大塚古墳	前方後円墳	林田憲義『松橋町史』(1964)
36	宇賀岳古墳	横穴式石室(装飾)	富樫卯三郎「宇賀岳古墳」 熊本の装飾古墳(1976)
37	御領東原古墳群	横穴式石室 3基	坂本経堯「御領東原古墳群」 不知火町史(1972)
38	柏原古墳	円墳	坂本経堯「柏原古墳」 不知火町史(1972)
39	向野田古墳	前方後円墳	本 書
40	御手水古墳	前方後円墳	
41	御手水2号墳	円墳	
42	南山内古墳	円墳	
43	チャン山(茶臼山)古墳	円墳(?)	富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獣鏡」 宇土市の文化財第1集(1972)
44	桶底古墳	横穴式石室	
45	上松山石棺	箱式石棺	
46	神ノ山古墳群	円墳・3基	富樫卯三郎「神ノ山古墳群」 宇土市の文化財第3集(1977)
47	境目石棺群	箱式石棺・8基	富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」 宇土城跡(西岡台)(1977)
48	古保里石棺群	箱式石棺・5基	同 上
49	二枝古墳	円墳	
50	晚免古墳	円墳	濱田・島田・梅原「肥後国宇土郡花園村の古墳」 京都帝国大学文学部考古学研究报告第3冊(1919)
51	潤野古墳	円墳	同 上
52	西潤野古墳		富樫卯三郎「古代から近代までの遺跡について」 花園小学校創立百周年記念誌(1975)
53	檜崎古墳	前方後円墳	梅原・古賀・下林「熊本県下にて発掘せられたる主要なる古墳の調査」 熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊(1925)
54	女夫塚古墳(男塚)	前方後円墳	富樫卯三郎「女夫塚古墳」 宇土市の文化財第1集(1972)
55	女夫塚古墳(女塚)	円墳	富樫卯三郎「古代から近代までの遺跡について」 花園小学校創立百周年記念誌(1975)
56	三日鬼の岩屋古墳	横穴式石室	
57	池尾古墳	前方後円墳(?)	
58	鳴瀧古墳	円墳	
59	真辻古墳	円墳	
60	大道夫婦塚古墳(男塚)	円墳	
61	大道夫婦塚古墳(女塚)	円墳	
62	ガローバル古墳	円墳	
63	西岡台遺跡		『宇土城跡(西岡台)』宇土市埋蔵文化財調査報告書 第1集(1977)
64	宇土城跡遺跡		
65	元米の山窯跡	須恵器窯跡	坂本経堯「古代の生産」 不知火町史(1972)
66	朱斗窯跡	須恵器窯跡	同 上
67	前田遺跡		佐藤伸二「中部九州における前期古墳発生の一側面」 法文論叢 第26号 史学編(1970)
68	畑中遺跡		
69	境目遺跡		富樫卯三郎『境目西原遺跡』(1969)
70	琵琶田窯跡	須恵器窯跡	
71	当尾小学校東窯跡	須恵器窯跡	

り、その上方に浮き出た感じの二重円文がある。他の側壁に10隻余の線刻の舟がある。石室構造上から6世紀後半の所産と考えられている。

国越古墳	6世紀前半	(乙益説)
不知火塚原第1号墳	6世紀～7世紀初	(三島説)
桂原古墳	6世紀後半	(三島説)
鴨籠古墳	5世紀末から6世紀初頭	(坂本説)

かつて後期前方後円墳と線刻の舟をもつ装飾古墳について、それぞれの被葬者のかかわりを着想したことがある。上記4墳の中、3墳はいずれも横穴式石室であり、6世紀代の編年が示される。地域的に不知火長崎を中心としたグループである。国越古墳は3屍床をそなえ、おそらく首長一族の合葬墓で、それら被葬者の支配が半島基部南辺から不知火海を通じ、行なわれたにちがいない。その際、水軍の主力をなして活動したのが塚原第1号墳や桂原古墳の被葬者をめぐる一味のものではなかったかとみられる。

国越古墳が、前期古墳の弁天山すぐ近く立地していることは不知火海制圧へ力点の置かれたことが考えられ、6世紀後半半島基部の政治的情況変化の一端が示されている。

向野田の古墳からやや西北約3kmの丘陵上標高100m余に前方後円の播鉢山古墳がある。前方部切断の形式で、かつて山林伐採中にくびれ部北側から破碎した底部穿孔土師器が数個つらなって出土した。有明・不知火両海を望み、また両海沿岸から仰がれる半島基部第一に数えられる立地を占めている。現在、前方部は道路と化し、後円部墳丘は密柑が栽植されている。

この古墳すぐ眼下に前方後円の迫ノ上古墳がある。割竹形木棺のカーブの明らかな粘土床をそなえた竪穴式石室で、調査当時割石小口積や蓋石がよく揃い、鏡などの出土が期待されたが、遺物は短剣その他わずかであった。盗掘のあったものであろうか。播鉢山との近接から迫ノ上は、おそらく播鉢山と同族関係のものともみられる。

播鉢山の被葬者は、半島基部周辺の支配確立の頃にあたり、不知火海制圧を示す弁天山古墳の被葬者とかかわりが考えられる。播鉢山被葬者の指示により不知火海へ臨む前線拠点として亀崎付近に弁天山被葬者は居を構えていたのでないかと臆測される。前期古墳の被葬者は、舟の装飾古墳とかかわる後期古墳の被葬者と異なり、みずから率先して水軍を指揮したのではなかったかと想像される。

播鉢山、迫ノ上の尾根続き東方端に前方後円の城ノ越古墳がある。ブルドーザーの採土で墳丘南側が残存していた。後円部に小形箱式石棺様のものが出土したが、主体部は失われ、割石積の痕跡はなく、墳丘わきの九州電力鉄塔付近に板状石材があり、箱式石棺の類があったのではないかと推測される。採土中、後円部から三角縁四神四獣鏡1面が出土した。出土地の明らかなものとして注目される。この鏡について先学から仿製鏡・舶載鏡二説のご教示をいただいたことがある。

とくに小林行雄博士から、この鏡が出土したことの意味を考えられるよとの趣意の私信をいただいたことがある。

なお半島基部北辺に国鉄三角線緑川駅東方すぐ近く突出した丘陵に前方後円の天神山古墳がある。古代にはほとんど海岸へ接していたかと思われる地形にある。前方部・後円部ともに崖崩れをなしているが、ほぼ完形の墳丘をなしている。後円部崖崩れの面で、盛土の跡が窮われる。その崖崩れ下方の面から土師器片が出土した。未調査で、おそらく立地からみて、後期古墳ではないかと思われる。

この古墳西北約2.5kmの丘陵上標高59mに梅崎山古墳がある。コ字形の巨石墳で東側壁に長さ1.29mの線刻の舟がある。舟底に右上から斜め左下へ20本余の櫂か櫓とみられる刻線がある。ほかにもう1隻あり、なお舟底の曲線らしいものがある。海をゆく巨船をしのばせるものがある。

天神山古墳南方約1.5kmの丘陵北斜面標高約40mの所に巨石の仮又古墳がある。横穴式石室で、東壁は約10隻、実に紛らわしい線刻があり、西壁は帆をあげた形の1隻の舟で、舟底に10本ほどの斜線がみられる。

本年1月、仮又古墳北方約800m、向い側ほぼ同じ標高の丘陵上で、天神さんの社裏手の籩にある通称鬼の岩屋が三角文の線刻などをもつ横穴式石室であることが発見された。字名は東畑という。

上述の国越古墳の場合と同じく、天神山古墳を中心として、梅崎山・仮又また東畑の装飾古墳のかかわりが考えられる。天神山古墳は未発掘で、今後の課題である。

仮又古墳東方約2.6kmの低丘陵上に宇土城跡(城山)がある。この城跡の石垣石材に舟などの線刻をもつものがあつた。大小の自然石もあるが、板状石材の大きさから石室が想像される。三の丸跡から出土し、その跡から小玉の熔融密着した小片も採集された。おそらく城山の付近にあつた装飾古墳のものではないかと思われる(古城古墳)。

東畑(飯塚天神)の古墳東方800mの丘陵上には金獄山古墳の横穴式石室がある。封土を失い、露出している。

宇土城(城山)出土の舟をもつ幻の装飾古墳古城古墳が天神山かどの古墳とかかわるものか、古墳分布の上から想定はむずかしい。ただ有明海を志向していることは明らかであろう。

舟の線刻をもつ装飾古墳は、いまのところ半島基部宇土山地の周辺に見出され、それぞれ有明・不知火両海を志向していることが注目される。

次に国道3号線東側、向野田古墳の丘陵に続く縁辺に立地する古墳として向野田古墳からやや東南約800mの丘陵突端に宇賀獄古墳がある。標高65m余、不知火海側に面した家形石棺の巨大化した形を呈する石室で、封土は失われ、屋根形の巨石が落ち込む。奥壁の2個の突起に並行して円文、連続三角文などの線刻がある。他の側壁にも幾何学的文様の線刻の跡が残る。

上述の新しい土着的な墓制の系統に属するものとしてあげられる。

宇賀獄古墳と上述の鴨籠古墳は、地形上立地の点でともに丘陵突端にあり、また巨大な柳壁や巨大な石棺状石室をそなえ、さらに幾何学的文様の線刻がある。先学により鴨籠は5世紀末から6世紀初頃に位置づけられたが、5世紀という見方もあり、宇賀獄はその時期からかなり下降したものではないかと考えられる。

宇賀獄古墳南方約1kmの低台地に前方後円の大塚古墳がある。最近、墳丘上が一部児童公園化された。その後、円筒埴輪片が表採された。児童公園開設の際、県文化課の一部調査があったと聞く。大塚古墳は半島基部南辺、不知火海の東北隅、大野川に臨み、不知火海制圧を志向している。半島基部北辺有明海沿岸に臨む天神山古墳とともに半島基部南北端を押え、それぞれ有明・不知火両海へ威容を示したものであろう。大塚も内部主体が未調査で、明らかでない。

向野田古墳から北方400m余の標高42m余丘陵上にチャン山(茶臼山)古墳があった。採土中、頂上崖面に露出し、調査した所、割石小口積ではないが、板石と塊石を積んだ粘土床の竪穴式石室残欠であった。粘土床から鳥獣鏡1面と直刀が出土した。鏡は後漢の鏡であった。石室構造などから墳形は前方後円墳ではなかったかと推測される。

本年1月、向野田古墳東北約250m、チャン山古墳東南約250mの標高46m丘陵突端に主軸方向北西、前方部を突端に向けた御手水の前方後円墳が櫟林伐採でその姿を現わしたことは上述した。御手水は後円部墳頂平坦部から前方部は細長く、立地上からも前期古墳らしく、処女墳ではないかと思われる。

御手水—チャン山—向野田の順序で、3基の地域的なグループが考えられる。

向野田古墳東北約2.5km雁回山南麓の花園山南側、立岡池北縁に前方後円の檜崎古墳、その東方400mに同じく前方後円の女夫塚古墳(男塚)がある。男塚東方約150mに残骸の女塚がある。

女夫塚古墳は墳丘北側が採土で削られ、石室構築に用いられたとみられる阿蘇凝灰岩の石材が2、3個放置されている。箱式石棺・割石小口積石室ではないことは察せられる。

檜崎古墳は家形石棺3基、石蓋土壙1基が後円部に露出し、板石が周りを囲む箱式石棺1基が前方部に同じく出土している。前方後円墳的な墳形とみられたが、昭和50年11月、前方後円墳として県指定史跡となった。6世紀前半に比定されている。檜崎古墳と女夫塚古墳は地域的なグループに数えられる。

檜崎古墳西南600mに円墳の晩免古墳があり、晩免南方約250mの標高約40m丘陵中腹に潤野古墳がある。晩免、潤野両古墳はともに家形石棺で、内壁に円文、連続三角文などの線刻がある。両古墳が上述の新しい土着的な墓制に属するとともに檜崎・女夫塚両古墳の付近にあり、それらとのかわりは今後の課題であろう。

檜崎（第2号棺）、晚免、潤野、檜崎西南約1kmの神ノ山、宇賀獄、国越など諸古墳の家形石棺内壁にはそれぞれ阿蘇凝灰岩の棺材に造りつけの突起がある^②。ことに檜崎、女夫塚の地域的なグループに4基が数えられ、半島基部をめぐる、国越へ続くことは石棺構造の上から技術的なつながりが窺われる。或は石棺製作の工人集団があり、彼等の手によったものではないかと想像される。そして彼等工人を利用した在地首長の間にもなんらかのかかわりがあったのではなかろうかと臆測される。

向野田古墳をめぐる遺跡を若干とりあげてゆくうちに、以前から気のついたことであつたけれど、とくに前方後円墳が半島基部の要所にわたり分布していることであつた。このことはそれらの前方後円墳被葬者が親縁関係か、服属関係か、とにかくつながりのある在地首長として半島基部を中心に支配的勢力を維持発展させてゆく必要から生じたものではなかつたかと考えられる。あらい素描にすぎないが、ここに宇土半島基部前方後円墳群と呼ぶことのできる意味が秘められているように思われる。

先学の諸説があるけれど、試みに宇土半島基部前方後円墳群の編年順を記したことがある^③。弁天山古墳→迫ノ上古墳→城ノ越古墳→チャン山（茶臼山）古墳→向野田古墳→国越古墳→檜崎古墳→女夫塚古墳。未調査の播鉢山古墳・松橋大塚古墳・天神山古墳・仁王塚古墳それに御手水古墳の5基は入れていない。

熊本県内の前方後円墳は、去る昭和41年1月現在で40基を数えたけれど、^④その後の新しい発見を加えると、今日62基が数えられる（巻末第18表熊本県内前方後円墳地名参照）。その中でも宇土半島基部の前方後円墳群は九州においても特異な地域であることが注目される^⑤。

なお宇土半島基部前方後円墳の地形実測図は、ほとんど筆者ら宇土高校社会部および同OBの協力により数年かかって作成された。仁王塚古墳のは、かつて社会部で着手したが、熊本商大生らが遂行した。御手水古墳はまだである。それらの地形実測図の若干は石人石馬研究会へ提供したことがある。

- 註 ① 富樫卯三郎「周辺の遺跡から見た西岡台」宇土城跡（西岡台）所収、宇土市教育委員会、1977
② 松本雅明・富樫卯三郎「縄式土器の編年」考古学雑誌第47巻第3号、1961
富樫卯三郎「甕貝塚と曾畑貝塚」宇土市の文化財第1集、1972
③ 古田一英「不知火町における早期縄文遺跡」不知火町史、1972
④ 乙益重隆「地域的にみた肥後の貝塚」肥後上代文化史、1954
⑤ 前掲書註④。昨年末から今春へかけ、県立松橋高校跡地で大野貝塚と一連とみられる御領式の貝塚を調査した。
⑥ 富樫卯三郎『境目西原遺跡』宇土市教育委員会、1969
富樫卯三郎「甕棺とその遺跡」宇土市の文化財第1集、1972
富樫卯三郎「熊本平野における条里制の遺構について」西日本史学、1951
日野・牧野・規工川・隈・島津「熊本県の条里」熊本県文化財調査報告第25集、1977
⑦ 前掲書註①
⑧ 三島裕「塚原第1号古墳」不知火町史学、1972

- ⑨ 富樫卯三郎「弁天山古墳調査概報」熊本史学第30号、1966
- ⑩ 乙益重隆「不知火町国越古墳」昭和41年度埋蔵文化財調査概報、1967
小林行雄「倭の五王の時代」古墳文化論考所収、1976
- ⑪ 森貞次郎『北部九州の古代文化』、1976
- ⑫ 濱田耕作、梅原末治「宇土郡不知火村古墳」肥後に於ける装飾ある古墳及横穴、京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊、1917、1976覆刻
坂本経堯「鴨籠古墳」不知火町史、1972
- ⑬ 前掲書註⑪
- ⑭ 三島格「桂原古墳」不知火町史、1972
- ⑮ 富樫卯三郎「摺鉢山古墳」宇土市の文化財第3集、1977
- ⑯ 富樫卯三郎「迫ノ上古墳」前掲書註⑮
- ⑰ 富樫卯三郎「宇土市栗崎町城ノ越出土の三角縁神獸鏡」熊本史学第33号、1967
- ⑱ 「城の越古墳の発見が熊本県の古墳文化に対する従来の知識を一変したものであることは何人も肯定せざるをえぬ事実と存じます。四世紀後半の中頃かどうかは別として、おそらく、熊本県の既知の古墳の中ではもっとも古い可能性のあるものでしょう。
この鏡を中国製と認めていただいた上で、その事実がどのような歴史を物語るかを、熊本県の問題として解決していただきたく存じます。」小林博士の私信による。1967.12.18付
- ⑲ 富樫卯三郎「天神山古墳」前掲書註⑮
- ⑳ 富樫卯三郎、清見末喜「梅咲山古墳発見線刻の舟」考古学ジャーナル20、1968、(咲は崎と訂正)
富樫卯三郎「梅崎山古墳」熊本の装飾古墳(松本雅明監修)、熊本日日新聞社、1976
- ㉑ 濱田・梅原・島田「肥後国宇土郡緑川村の古墳」九州における装飾ある古墳、京都帝国大学文学部考古学研究報告第3冊、1919、1976覆刻
- ㉒ 的場義夫「装飾をもつ宇土市飯塚天神古墳発見のいきさつ」宇土とところどころ、1978
- ㉓ 富樫卯三郎「宇土古城古墳」前書掲註㉒熊本の装飾古墳
- ㉔ 濱田・梅原・島田「肥後国下益城郡松橋の古墳」前掲書註㉒
- 富樫卯三郎「熊本県宇賀郡古墳の装飾」古代学研究68、1973
- ㉕ 富樫卯三郎「茶臼山古墳出土の鳥獸鏡」石人 No.106、1968
- ㉖ 富樫卯三郎「女夫塚古墳」前掲書註㉒宇土市の文化財第1集
- ㉗ 梅原・古賀・下林「宇土郡橋崎の古墳」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第2冊、1925
- ㉘ 濱田・梅原・島田「肥後国宇土郡花園村の古墳」前掲書註㉒
- ㉙ 三島格「九州における突起ある横穴式石室墳」熊本史学第13号、1957
富樫卯三郎「石棺内の突起は刀架 神ノ山古墳」西日本新聞、1967.7.9付
- ㉚ 前掲書註①
- ㉛ 三島格「肥後における古墳研究—戦後の成果と問題点—」、古代文化第17巻第3号、1966
- ㉜ 前掲書註㉚
- 松本雅明「前方後円墳の発生」古代アジアと九州、1973
松本雅明「日本古代文化の成立と海上の道」東アジアの古代文化第14号、1978

第2表

宇土半島基部前方

編年 順	名 称	発 見	所 在 地	立 地	内 部 主 体	全 長	後円部径
1	弁天山古墳	昭和38年12月	宇土郡不知火町長崎字弁天山619-1	丘陵突端上	竪穴式石室	*53 [53]	*35 [35]
2	迫ノ上古墳	昭和40年8月	宇土市神合町字水谷865-4.5.6	尾 根 上	竪穴式石室	*54(56) [58]	*28(32) [39]
3	城ノ越古墳	昭和41年4月	宇土市栗崎町字城ノ越658	丘陵突端上	箱式石棺(?)	* (49)	* (28)
4	チャン山古墳(茶白山)	昭和42年2月 (墳形推定)	宇土市松山町字南山内2106-1	丘陵突端上	竪穴式石室		30
5	向野田古墳	昭和42年6月	宇土市松山町字向野田3993	丘陵突端上	竪穴式石室 舟形石棺	89 [86]	55 [52]
6	国越古墳	昭和38年12月	宇土郡不知火町長崎字国越581	丘陵突端上	横穴式石室	*65	*42
7	檜崎古墳	大正10年10月 (昭和50年指定)	宇土市花園町字檜崎428-2	丘陵突端上	家形石棺3基 石蓋土壘 箱式石棺	(32)	(18)
8	女夫塚古墳		下益城郡松橋町古保山字女夫塚620	台地縁辺	巨石墳(横穴式石室?)	*46	*26
	摺鉢山古墳	昭和40年8月	宇土市神合町字水谷861	尾 根 上	未 調 査	*96 [100]	*64 [62]
	松橋大塚古墳		下益城郡松橋町字前田376-378	台地縁辺	未 調 査	*79	*45
	天神山古墳	昭和40年12月	宇土市野鶴町字桜畑1311-1-11	丘陵突端上	未 調 査	*(110)	* (60)
	仁王塚古墳	昭和43年12月	宇土郡不知火町字袖ノ原	丘陵突端上	未 調 査	46.8	21.8
	御手水	昭和53年1月	宇土市松山町字御手水	丘陵突端上	未 調 査	65	37

註 本表の墳丘計測数値の中、*は三島計測(古代文化第17巻第3号)
「」は松本計測(九州文化論集1)による ()は復原数値

後円墳群編年試案

前方部幅	後円部高	前方部高	遺物その他	現況
*21 [20]	*4.5(6) [6]	*2.5(3) [3]	底部穿孔壺形土師器・甕形土器・小形丸底埴	埋め戻し保存、後円部蜜柑畑の高みとなる
* (15) [15]	*4 [4]	*2 [2]	刀子・鉄鏃・土師器片(粘土床から) 鉄剣・直刀・ヤリガンナ・刀子(棺内)	埋め戻し保存、後円部蜜柑畑の高みとなる
	*4	2.5	残存後円部から小形箱式石棺出土 採土中、三角縁四神四獣鏡出土(船載鏡、仿製鏡二説がある)周溝の跡が残る	蜜柑畑となり、消滅
	5		粘土床から直刀・鳥獣鏡出土	採土で消滅
35 [39]	9 [9]	6 [6]	方格規矩鏡・内行花文鏡・鳥獣鏡・ヒスイ勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉・碧玉製車輪石・貝輪片(石棺内) 鉄剣・直刀・鉄斧・刀子(石室と石棺の間) 朝顔形埴輪	前方部は採土のため消滅
*27	*6	*5	画文帯神獸鏡・鹿角製直弧文飾付鉄矛・ガラス勾玉・ガラス小玉・ガラス粟玉・鉄鏃・帯先金具・鉄製帯金具(以上石棺内) 四獣鏡・純金環・純銀環・鉄鏃・鉄刀(東屍床内) 獸帯鏡・金環・純金環・硬玉製大勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉・銀製空玉・ガラス丸玉・鉄矛(西屍床内) 鉄斧・鉄ノミ・刀子・ヤリガンナ・矛の石突・鉄矛・鉄鋤先・鉄鎌・鉄鏃・雛形鉄斧・同鋤先・同刀子・同鎌・同鋤先・銅製椀・杏葉・辻金具・鉄製帯金具(別床内) 須恵小形高杯・脚台付壺(蓋付)(中央通路) 埴輪円筒片・象形埴輪片(手・釧・鈴釧・壺・大刀)	埋め戻し保存 羨門部および羨道は露出したまま
(15)	3	2	直刀・鉄鏃(第1号棺)・直刀(箱式石棺)	盛土がなくなり、石棺など露出したまま
*24	*5	*5.5	赤褐色土と黒色土の交互版築 土師器・須恵器片出土 東方近く残骸の女塚残存	半壊、後円部北側、くびれ部北側が削られる
*15 [25]	*11 [12]	*8 [6]	北側くびれ部に底部穿孔壺形土器列一部出土	前方部道路となり消滅、後円部蜜柑の段々畑となる
*28	*5	*3	遺物不明 南側近くの畑地から円筒埴輪10個ほど出土、但し関係不明	後円部上、またその前に石碑や墓碑が立つ 前方部広場化
* (40)	14	9	後円部東側断面下層から土師器出土 断面に盛り土のあとがみられる	前方部前端垂直にくずれ、後円部東側垂直に削られる
26.8	3.5	3.5	周溝の跡が残る	藪となり、墳形がつかみにくい
15	4.5	3		山林伐採で発見、古式古墳とみられる

Ⅲ 調査の経過

1. 前方部調査

昭和42年12月29日

向野田古墳の前方部前方にブルドーザーが入ったことを宇土高校社会部々長高木君から伝えてきた。

同43年1月3日 同社会部OBの古田君からの連絡で、同君らとともに向野田古墳向い側の丘陵不知火町小曾部の仁王塚の山へ登った。同君の発見はまちがいでなく、ここに仁王塚前方後円墳の存在が明らかとなった。その後、宇土高校社会部で墳丘実測に着手したけれど続かず、熊本商大生山下君らの手で行なわれた。

1月初め 仁王塚古墳発見後、社会部、同OB諸君らと向野田へ登り、墳丘上を踏査した。前方部東北の一角に葺石、前方部西側に埴輪片、またくびれ部西側辺に葺石のあることをみとめた。

1月28日 向野田古墳すぐ下、国道3号線沿いのドライブイン味食堂で宇土地方の遺跡などを調べ、また守るため「宇土文化の会」を結成した。故坂本経堯先生（当時肥後考古学会会長）、宇土市文化財専門委員、市社会教育課主事、考古学研究者、宇土高校社会部、同OB多くの方々の参加を得た。また採土現場の池田組池田四男氏も出席された。会結成後、一同で向野田古墳に登った。坂本先生は、墳頂がフラットであり、古式のものであることを指摘された。

2月1日 暮れ方に池田組の現場から石棺かなにか出たとの連絡があり、すぐ駆けつけた。現場の方にお礼を述べ、調べると、それは石蓋土壙であった。

前方部前端北西へ数10m離れて、ブルドーザーが削平して細長く残った西側丘陵の崖面に石材の一部と石材下方に穴がある。市当局へ緊急調査を届け出て、2月3・4日宇土高社会部で調査した。遺物はなかった。宇土市花園町檜崎古墳の石蓋土壙と似たところがある。向野田古墳の近くにあり、或は陪塚であろうか。遺物もなく、明らかでない。

2月10日 市文化財専門委員会で3月まで墳丘採土の中止を申し合わせるとともに向野田古墳の重要性和保存について県・市へ具申書を提出した。前年9月にも肥後考古学会を通じて同趣旨の要望書を提出していた。

2月12日 熊本大学松本雅明教授へ向野田古墳について宇土高社会部との共同調査のことを私信で申し入れた。

3月10日 向野田の石蓋土壙が崩され、消滅したことを宇土高社会部員から聞いた。

3月11日 現場の池田組から市当局へ前方部だけでも調査をとの要請があり、また宇土高へも池田組から電話連絡があった。高校入試、学年末の多忙と、また調査後の破壊のことを考えると、大前方後円墳でもあり、簡単に着手できなかった。

4月5日 市文化財専門委員会では向野田古墳へ登った。採土のブルドーザーは相変わらず動いていた。
4月29日 現場関係者からの電話で、社会部の井上君が行った由を聞き、暮れ方すぐ出かけた。ブルドーザーが前方部へ少し入り、前方部西側を細長く残して、上面を後円部近くまで削平していた。翌日、市当局へ出かけ、県当局へ連絡を願い、またやむなく緊急調査のことを申し入れた。5月3・4・5日の子定。

昭和43年5月の前方部調査

5月3日(金) 雨で中止。
5月4日(土) 晴 高木・井上両君にブルドーザーで壊されたあとの地形測図、前方部残存個所の草木を払うことを注意する。九州学院の山下君らがきた。明日、第二高校がくる由。古田・清見・枝森諸氏へ電話。
5月5日(日) 曇のち雨 九州学院・第二高校・宇土高校、枝森・西原両氏、本郷主事参加。
前方部西側残存個所を発掘。昼食後、雨がふり、池田組事務所で休む。3時過ぎ、次の土・日を期して散じた山の石・木の根など片付けて帰る。
5月11日(土) 曇のち小雨
5月12日(日) 小雨のち晴 九学・第二高・宇土高、井上委員参加。
先日に続き、発掘。実測をはじめる。トレンチを入れ、Eでは地山を出した。葎石や埴輪片出る。須恵器杯の蓋のような破片も出る。80cmの表土下に土師器片。向野田の山下に住む緒方増男氏がこられ、昨日ゴルフしながら池田組の社長と話した由、後円部を残すという。そこに九州電力の鉄塔が立っている。
6月1日(土) 曇 先日発掘した前方部の後片付けをした。現場の池田四男氏から前方部残存個所はノリをつけて残されるということを伺った。熊日(熊本日日新聞社…以下同じ)の中村記者が取材された。
現場の人から、今そういつているけれど、先でどうなるか分からない、後円部を調査したらとの注意があった。

2. 後円部調査

昭和44年5月30日(金) 晴 古田君からの連絡で、暮れ方2人で向野田へ登る。ブルドーザーは前方部を削り、前方部下方に1台、また後円部東側から墳頂を越え、前方部上に1台がとまり、ショックを受けた。調査を迫られている。

6月4日(水) 晴 中間調査終りの日、社会部の高木君から、ついで沖村君からも向野田について連絡があった。夕方、高木君と登る。

6月5日(木) 小雨 市の萩原主事と向野田へ。池田組からも連絡があった由。

6月6日(金) 小雨のち晴 市の上田課長、現場の池田氏らと向野田へ。現状から緊急調査の要があり、県当局へ連絡をお願いした。社会部・同OBは、連日見守っており、直ちに調査にかかることを打ち合わせた。沖村君らが体育部から借りたテントを向野田の墳頂へ張りに行く。池田組では鉄塔の基礎レベルまで削平するということを知った。

昭和44年6月の後円部調査

6月7日(土) 晴 宇土高校社会部・同OB、枝森・西原・清見諸氏、井上委員参加。

後円部墳頂の平坦部に南北、東西へ十字形のブリッジを設け、夕方まで発掘した。西北の一角で一部粘土の被覆が出土した。

6月8日(日) 晴 宇土高校、九州学院で十字形の西北角から発掘を進め、粘土被覆の脇に平たい割石が出土した。追ノ上古墳の割石積みと似ている、被覆粘土の厚さ30cm~35cm。押しつぶされたようなカーブをなしている。平坦部を測図し、鉄塔東端の鉄柱底部に-1mのしるしをつける。夕方7時頃終る。

6月9日(月) 晴 宇土高校・同OB、山下・西原両氏参加。発掘継続。南北ブリッジの断面図をとる。

6月10日(火) 晴 OBで継続。萩原主事参加。放課後、社会部が行く。林原教育長、龍野主事と登り、視察された。墳頂平坦部東側に小さな列石状の自然石が出土し、また墓壙東北隅に長さ40cm前後の平たい石が2個、階段状に見つかった。

6月11日(水) 小雨

6月12日(木) 小雨のち曇 OBが測図継続。夜、明日南北ブリッジを外すとの電話連絡があった。

6月13日(金) 晴 鉄塔から墓壙の写真を撮り、南北ブリッジを外した。測図継続。午後7時半頃下る。東海高校から15日生徒4名くる由連絡があった。萩原主事参加。

6月14日(土) 晴 鏡製材所で材木を求め、測量用具を整え、向野田へ。林原教育長、八代の九州電力支所長と登られた。萩原主事から県当局は午後4時まで会議がある由。九州学院山下君ら10名応援にくる。頂上の採土を整理した。葎石らしいものがあり、土師片がまじっていた。日没、7時半頃下る。南北東西のブリッジがとれて、粘土被覆の堅穴式石室上面の全景が墓壙内にある。

6月15日(日) 晴 宇土高校・同OB・九州学院・松橋高校・東海高校・枝森・西原・井上・萩原主事参加。

墓壙内を掃除し、鉄塔から写真を撮る。測図用の杭を打つ。用意の薄板を古田君提供の板材に替える。水糸を張る。粘土被覆を実測。作業前、枝森氏が祝詞をあげ、一同黙禱した。皆で粘土をはぐ。緒方正一氏の世話してくれた丸太と鉄棒を利用し、天井石7枚をあげた。石室内部に舟形の石棺があり、赤色顔料も鮮やか、石室内壁と巨大な縄掛け突起の石棺の間、ことに北側に直刀・鉄斧・刀子などが目立った。天幕を覆いにして、午後7時頃下る。

6月16日(月) 晴 市当局へ行き、県へ石室内石棺のことを連絡の上、県から来ていただくようお願いした。田辺哲夫県文化財専門委員がこられる由。

県の上野主事・市の上田課長が井上委員と向野田へ。地主の藤谷義雄氏もこられていた。話し合いの結果、とにかく後円部の竪穴式石室と石棺は保存に決まった。この日、はじめて藤谷氏と会うことができた。それまで池田組が前面にあつて交渉された。放課後、また登る。OBが測図する。

6月17日(火)小雨 枝森氏の手紙を女生徒が持参、昨日阿曾田県議が宇城県事務所長と向野田へ登った由。

6月18日(水)曇 宇土高校・同OBで測図継続。萩原主事から石室・石棺をめぐり、残す面積の図面で問い合わせがある。九州電力では、鉄塔の付近7m平方は必要という。現場の状況からみて、鉄塔を含む後円部墳頂の保存区域を考える。

原口・小田両先生・上野主事がこられる。西原・清田両氏も登られた由。

6月19日(木)小雨 登校前、清田氏から調査について助言の電話があつた。

- (1) 続ける。
- (2) 蓋をして、後日やる。
- (3) 蓋をしたまま保存。

午後、市文化財専門委員会が教育長室で開かれた。同委員会として調査続行に決まる。

熊本の佐藤助手と会い、松本教授宅へ。緒方勉氏も来ていた。教授はやってはといわれる。

6月20日(金)晴 向野田へ。萩原主事・佐藤助手・古田君らがあつた。西原・清田両氏もこられる。社会部で実測にかかろうとしたが、遅いので帰した。

6月21日(土)曇 午前中、大和市長が向野田へ登られた由、上田課長から電話があつた。午後、登ると、乙益教授・上野主事がこられた。坂本先生は、先に登られていたよう。伊藤・西両先生もおられる。古田君もきていた。乙益教授から、測図について迫ノ上、大王山を参考にしたらと助言があつた。三島先生もこられた。

6月22日(日)雨のち晴 午前中、出かけようとしたら雨。石村君ら登った由、療護園の白石園長ら見えて降りられたらしい。午後、熊本の肥後考古学会へ。スライドにより、向野田古墳の中間報告をする。簡単に調査過程を示した。

6月23日(月)晴 午前中、上田課長・本郷主事・井上委員と市長室で市長と会う。話し合いの末、市から調査費25万円を組まれることになり、市長から続けてやるように励まされた。

社会部で実測継続。

6月24日(火)晴 OBら実測継続。市議長、文教委員が登るので待ったが、都合で明日になる。枝森氏と登ると、清見氏、萩原主事が来ていた。ブルドーザーが後円部東脇を通り、前方部上にある。市の中山総務課長らが見えた由。

6月25日(水)雨

6月26日(木)曇のち晴 昨日かなり雨が降ったのに、ビニールの覆いに水は乾いて無い。石室内は異状がみられない。

6月27日(金)晴 市当局へ県から調査につき予算・メンバーなどが不十分なので、現在の測図でとめるようにとの公文が昨日きていた。

6月28日(土) 晴のち小雨 市議長・副議長・収入役・文教委員・林原教育長・上田課長ら一行と登る。向野田古墳について視察された。石棺の測図へかかったが、小雨で中止した。今日もブルドーザーが前方部上で動く。

6月29日(日) 雨

6月30日(月) 曇 向野田古墳調査について、市長と松本教授・佐藤助手・県の田辺哲夫委員・上野主事・市の上田課長・本郷主事・市文化財専門委員らの話し合いがあった。教授から万日山の例を引かれ、現状からみて、発掘調査の上保存するという見解を述べられた。結局、保存個所の杭打ち、測図後鉄器を取り上げ、天井石をもとへかけること、地主との交渉、調査方法をたてることなどで話し合いを終った。

7月3日(木) 晴のち小雨 佐藤助手・桑原先生・高木氏が見える。上田課長もこられた。測図後、鉄器を一部取り上げた。

7月4日(金) 雨 井上委員雨のなかを登って雨の水吐けの具合を見て、排水口がないか見回られた由。雨水は石室まで行かぬうちに割石敷へ吸い込まれたという。

7月7日(月) 雨のち晴 枝森氏のお世話でチェーン・ブロックを用い、天井石を元通りにした。井上委員、古田君ら現場へ。

7月9日(水) 曇 鉄器を東京の国立文化財研究所へ送って修理してはと県の助言があった由、本郷主事から聞く。熊本日日新聞社後援のことなどもあり、松本教授宅を中山君と訪れた。

7月10日(木) 晴 向野田古墳の調査費を組む。40万円を超える概算を作った。資料報告、保存施設などまで考えれば、切りがない。

7月11日(金) 晴 市当局へ調査費概算書を持って行く。

7月12日(土) 雨のち晴 向野田の実測継続、雨でできない。

7月13日(日) 晴のち雨 枝森・西原両氏が向野田へ、三角の山村氏(八雲園)がチェーン・ブロックをとり市役所へこられた。

7月14日(月) 曇 松本教授へ電話。スタッフを揃え、資金面を用意し、その上で県当局へ交渉することにした。井上委員と林原教育長、上田課長と会い、松本教授との話を伝えた。調査期間を10日間とする。三島先生から「福岡市老司古墳」が送られてきた。

7月17日(木) 晴 井上委員と熊本の地主藤谷氏の憩別荘を訪ねたが、不在。松本教授宅へ回った。向野田で借金しましょうやといわれたのには感銘した。教授から、調査費60万円、保存施設40万円、報告20万円。市から25万円、熊日20万円、あと醸金という案を伺う。

7月18日(金) 晴 市当局へ、松本案を連絡した。古田君へ測量用の板木を返し、お礼した。

7月19日(土) 晴 本郷主事から議会運営委員会へ向野田古墳のことをかけると連絡があった。

7月21日(月) 晴 井上委員と画図町の藤谷義雄氏を訪ね、向野田古墳発掘の地主承諾書印をいただく。

7月22日(火) 晴 市当局へ行く。林原教育長が向野田の予算のことで、市25万、熊日20万、あと醸金15万と電話されていた。議会への由。本郷主事へ藤谷氏の承諾書渡した。

7月25日(金) 県当局へ発掘届を提出した。井上委員同行。

その後、8月4日藤谷氏から遺物保管承諾書印、同21日原口長之先生調査員承諾印、同22日再度訪問で乙

益教授調査員承諾印をいただき、同23日県当局へ提出した。同25日、林原教育長・本郷主事・井上委員と県当局へ、上野主事と会った。

8月24日(日)晴 昨日、後円部近くにブルドーザーがかかり、社会部で杭を打ち、縄を張った由。前方部残りの岩盤へダイナマイト30本くらい打つという。

8月25日(月)雨 午後、松本教授・井上委員と熊日に平野政治部長を訪ね、向野田古墳発掘調査への協力について島田専務、築紫地方部長と会い、御礼を述べた。

8月27日(水)晴のち曇 夕方沖村・右田両君が来宅。向野田の後円部北端で大ひびが入り、崩れ落ちそうになっているとのことで、現場へ行く。社会部・同OBも来ていた。

8月28日(木)晴 熊日への原稿・墳形破壊の図・現場写真を持って、松本教授を訪ねた。帰り、熊日へ寄り、原稿などを渡した。

8月30日(土)曇 夜、松本教授からの電話で、県の田辺哲夫氏が熊日へ、また平野政治部長が県へ、それぞれ御足労いただいたことを伺った。

9月1日(月)晴 午後、林原教育長、上田課長、本郷主事と会い、発掘調査のことについて話し合う。調査員の宿舎は市内岬旅館を予定。

9月10日(水) 熊本日日新聞に、宇土市教育委員会と熊日共催で向野田古墳の熊日学術調査団により13日から調査を行なうことが発表される。併せて「向野田古墳調査の意義」(富樫)と「宇土地方の古墳群」(松本教授)が掲載された。

昭和44年9月の後円部調査

9月13日(土)晴 午後1時半、向野田古墳熊日学術調査団結団式が現場墳頂で行なわれた。

出席者 伊豆熊本日新聞社長(調査団長)代理平野政治部長、大和宇土市長(副団長)代理林原教育長、松本隊長(熊本大学教授)、富樫副隊長(宇土高校教諭)、調査員坂本肥後考古学会長、田添夏喜玉名市文化財保護委員長、北條熊本大学医学部助手、佐藤伸二熊本大学法文学部助手、井上正宇土市文化財専門委員、枝森久一三角町文化財協力委員、別府大学生山崎純男、明治大学生石橋新次、宇土高校社会部、同OB、熊本商大生数島安人、同平山修一、九州学院高校考古学部約7名。

西岡神社中林神官による神事のあと、平野部長・林原教育長の挨拶、ついで松本教授から調査の意義を説明された。結団式の終了後、早速墓壇内石室上面を覆った天幕、材木などを片付け、5時過ぎ天井石を墓壇西側壁へ運び、立てかけた。竪穴式石室上面周りの粘土をとる。墳頂平坦部東南隅の雑木を切りはじめ、東斜面にも手をつける。佐藤助手・山崎・石橋両氏・OBで石室および石棺の実測に着手。

9月14日(日)曇 宇土高校社会部、同OB、九州学院、第二高校参加。

石室および石棺の実測続行。平山君、九学5名と測量へ。山崎君・宇土高・第二高4名と東斜面トレンチ発掘、東斜面3段目に葺石の一部が出土した。石室西側壁の一部をとり外しにかかる。石室側壁が迫持式に狭くなり開棺できないので、葺石のとり外しもやむをえない。枝森・山村(八雲園主)両氏らの手により、チェーン・ブロックを設置した。

江上敏勝八代史談会員・同中田好則両氏・鶴田倉造松橋養護学校主事・阿部堅二天草農高大矢野分校教諭・西原昭明宇土文化の会員・同坂口和子氏らが調査、視察へこられた。午後、阿曾田勝県議（文教治安常任委員長）が視察された。夕方、緒方勉肥後考古学会員、ついで三島格福岡市教委文化財主事がこられた。

9月15日（月）晴 開棺の日。昼前、全員墓墳の周辺に集合、枝森氏が祝詞をあげ、一同黙禱。枝森・山村・西原3氏、佐藤助手らでチェーン・ブロックを使い、割れた棺蓋南側部分、ついでその北側部分をあげ、墓墳東側に置く。棺身北側の枕石に頭骸をのせた仰臥伸展葬の人骨はほぼ完形とみられる。頭部の枕上に2面の鏡、枕石すぐ下、棺身西側に立てかけた形の鏡1面、同じく棺身西側で腰部近く車輪石1個、頭部から両腕付近に玉類、足の先方にいくつかの貝輪片がある。棺内は赤色顔料がみられ、ことに頭部辺は鮮やか。棺底に1条の浅い溝がある。開棺直後、作業を見守っていた人びとは等しく一種異様な感に打たれたことであろう。松本教授から簡明な説明がなされた。

大和市長・林原教育長・平野政治部長・乙益教授・原口県教委指導主事・小森緑川小校長・板橋熊本大学国史科助手・古財植木町文化財保護委員・清田東海大戸馳分室主事らが視察された。現場の保護を慎重にした。

9月16日（火）曇のち晴 佐藤助手らが石棺内の実測。東斜面のトレンチの発掘、実測など続行。熊日中村記者が出土品につき、松本教授から取材された。午後、熊大医学部北條助手らがこられた。棺内の調査実測から人骨の取り上げまでは行かなかった。

9月17日（水）曇のち晴 石棺内実測その他続行。熊日平野政治部長から20日午後7時半頃から宿舎岬旅館で発掘調査の座談会開催の電話があり、市当局へ連絡のことを頼まれた。県の上野主事が視察された。

9月18日（木）晴 棺内実測その他続行。午後、北條助手らが人骨を調査された。夕方、人骨は熊大医学部第二解剖学教室へ運ばれた。熊日島田専務ら一行・地主藤谷義雄氏・松川武男宇土市教育委員長・岡崎正人同市議・沢山収蔵同文化財専門委員・清田盛也東海大有明分室主事・串山真勝マリスト高教諭・伊藤奎二済々黌高教諭・杉本正蔵岩古曾地区郷友会長らが見学、協力された。

9月19日（金）晴 棺内玉類などの実測を終え、石室の実測へ。トレンチ作業を続行。中村宇土市助役、栗田収入役ら見学にこられた。

9月20日（土） 石室側面、断面など、棺蓋の実測が進む。墳頂平坦部東側の葺石を探し、また後円部南斜面へトレンチを入れた。

城南町社会教育課徳本明・県文書課花岡興輝氏らが視察にこられた。

9月21日（日）晴 後円部南斜面のトレンチで口縁の欠けた壺形土器1個が出土した。雑木林の南斜面ではトレンチ発掘は壺形土器出土の辺までとした。石棺南端でその基底部を掘り下げた。石棺基底部下の調査は宇土地方ではじめてである。酒井福岡県教育庁文化課技師・平野市文化財専門委員らが視察された。この日から宇土高文化祭で、向野田古墳出土の副葬品が展示された。開棺後、連日宇土市民をはじめ各地から多くの人びとが現場へこられた。取り上げた主な副葬品は現場へ運び、団員が説明に当り、見学に供した。

9月22日（月）曇 石室断面の実測、後円部南斜面トレンチの実測、また後円部斜面の地形実測など続ける。

9月23日（火）曇 棺身は磨いてあるけれど、棺蓋は削ったあとが残っている。棺蓋の一部を拓本にとつ

た。後円部東斜面の中腹、南斜面で実測を続行。午後3時頃、チェーン・ブロックを使い、枝森・山村・西原・尾崎諸氏が棺蓋を棺身の上にのせ、棺を閉じた。トレンチの一部埋め戻しに全員でかかる。

9月24日(水)晴 夕方RKKテレビで松本教授、平野政治部長と筆者の三者対談で、向野田古墳発掘調査について録画をとった。

9月25日(木)晴 熊日紙上に先日の座談会の話し合いをまとめた記事が「若き女王の墓を掘る」というタイトルで掲載された。併せて松本教授が「前期古墳の問題点」という論文を執筆された。

9月26日(金)曇 後円部東斜面トレンチの葺石を実測。東斜面の墳頂近い面にも葺石や埴輪片が出土した。松本教授へ石室復元のことなどを連絡。

高校は2学期中で、またOBは大学生で、それぞれ学業の間を縫って、10月初旬まで残りの調査を続けた。

10月7日(月)晴 市当局からトラック2台分粘土を墳頂へ運んだ。人夫8名で、ベルト・コンベアを使うことにした。天井石の上に粘土被覆を復元した後、墓壙の埋め戻しにかかった。

8日は小雨、9日墓壙内は七分通り埋まった。10日墳頂東側すぐ下方で土師器の小皿1個が採取された。16日も墓壙やトレンチの埋め戻しにかかった。17日墳頂で、心ばかりの木碑へ竹筒の花立てに菊を生け、割石の中で枕用の石材かとみられた石の上に湯呑を供えた。